

濡甘ダーリン

〜桜井家次女の復縁事情〜

ひんやりとした海風が吹く海岸沿いの砂浜で、桜井早紀は純白のウェディングドレスに身を包みカメラの前でポーズを取っている。

立春を二日後に控えた今日、朝六時半に都内某駅前に集合し、一路ロケ先に向かった。

空は快晴。海上には十数人のサーファーが波待ちをしているが、今週末は雪が降るといっただけあって肌を刺す空気が痛いほどだ。

「早紀ちゃん、目線こっち！」

「はい！」

カメラマンに呼びかけられ、早紀はにこやかに微笑みながらカメラのほうを向いた。

中学生の時にスカウトされて以来、早紀は雑誌やアパレルブランドのイメージモデルとして活躍してきた。今日の撮影は、とあるファッション雑誌のウェディング特集。発売日は二カ月後の四月で、設定は海辺ではしゃぐ六月の花嫁。

これまでにも何度か花嫁の衣装を着てカメラの前に立った早紀だが、吹きさらしの海辺でウェディングドレスを着るのは今回がはじめてだ。

しかし、モデルたる者、たとえ季節がいつであろうと、仕事では最高のパフォーマンスを発揮しなくてはならない。

カメラマンの要求を的確に捉え、期待どおりのポーズを取って表情を作る。たまにそれを苦痛に感じる事もあるけれど、雑誌を手にとってくれる読者や一緒に頑張ってくれているスタッフのためにも、泣き言など言っていられない。

集合時刻から、およそ八時間。早紀は最後まで幸せな花嫁を演じ切った。

すべての撮影が完了し、笑顔でスタッフとともに仕事終わりの拍手をする。

ロケバスに向かう途中、花婿役の男性モデルから熱い缶コーヒーを差し出された。礼を言っただけを受け取ると、早紀はバスの奥でセーターとジーンズに着替えて座席に腰を下ろす。

今日もやり切った——その達成感は、何ものにも代えがたい。

早紀は、ようやく肩の力を抜いて缶コーヒーを一口飲んだ。

先週は婚活中のOLという設定でカメラの前に立ち、その前の週は退社後に保育園に向かう働くママを演じた。紙面の中の早紀は女性として至極幸せで充実した生活を送っている。

しかし、実際はどうかと問われたら、まるで違うと言わざるを得ない。

早紀は今年で二十七歳。彼氏いない歴四年で、今のところ恋人ができる予定もないのが現状だ。だからといって、別に寂しくないし、今の自分に満足している。

それは嘘偽りのない本当の気持ちだった。

(まだ二十七歳……されど、もう二十七歳なんだよね……)

早紀の姉のまどかは、五年前に同じ商社に勤務する同期の男性と結婚した。

その時、姉は二十六歳。

このところ友達も立て続けに三人結婚したし、周りは彼氏持ちばかりだ。

今のままでも十分楽しいが、その一方で幸せそうなカップルを見ると、ふと、寂しくなる。

「あくあ。なんだか結婚したくなっちゃったなあ」

思わず漏れた言葉に驚いて、あわてふためく。

(突然何を言い出すのよ、自分！ 嘘、結婚したいなんて嘘だから！)

幸い誰にも聞かれていなかったものの、急いで頭の中で否定し、冗談だと笑い飛ばそうとした。

けれど、妙に切実すぎて笑えない。

早紀は無意識に左手の薬指を指先で擦ると、シートの背もたれに寄りかかり小さくため息を吐くのだった。

早紀が所属している「長峰エージェンシー」は、モデルやタレントを二千人以上抱える大手芸能マネージメント会社だ。

下は零歳から上は八十歳までと幅広く、早紀と同年代の日本人女性モデルは七十二人いる。

三月の初旬、早紀は所属事務所、雑用をこなしていた。

モデルといえば華やかなイメージがあるが、オフアワーがなければ当然給料はゼロだ。

幸い、早紀はコンスタントに仕事をもらっているが、いつ無収入になるかわからない。それを考

えて、モデルの仕事がない時は、こうして事務のアルバイトとして働かせてもらっているのだ。
(いざという時のために、蓄えは必要だからね)

モデルという職業柄、どうしても公私ともに派手に見られがちだが、早紀は結構現実的で、堅実なタイプだったりする。

モデルなんてある意味人気商売だし、いつまで続けられるかわからない。

それでなくても、今年の十一月号をもって二十歳の時から専属モデルを務めた雑誌「CLAP」からの卒業が決まった。

今まで割と順調にキャリアを積んできたと思うが、おそらく今が早紀の仕事における正念場だろう。現状に甘んじる事なく努力し、成長し続けなければ、仕事が先細りになりフェードアウトせざるを得なくなってしまう。

(せっかくここまで頑張ってきたんだもの。それだけはイヤだ)

最初こそ、ただ言われるままに仕事をこなしてきたが、今は違う。モデルという職業に誇りを持っているし、プロとしてきちんと自己管理も心掛けていた。

もちろん、努力だけでやっていける仕事ではないので、今後もモデル業を続けていくために何かしらの次のステップに繋がる足掛かりがほしいところなのだが……

傍から見れば、早紀は万事順調でなんの問題もないように見えるかもしれない。けれど、堅実な性格ゆえか常に悩みを抱えていた。

それは将来に対する漠然とした不安だったり、もつと頑張らなければという焦燥感だったり……

困った事に、じわじわと結婚願望も出てきた。

(お姉ちゃんは今商社でバリバリ働きながら二児の母として頑張ってるし、妹の花は管理栄養士を目指して学校に通ってる。なのに私は――)

恋も仕事も、もつと充実させたいという気持ちはあるが、なかなか思うようにはいかない。

一体、いつになれば今の中途半端な状態から抜け出せるのだろうか？

気持ちは焦るばかりで、一歩も前に進めていない気がする。

「早紀ちゃん、手が空いたらSNS経由の応募書類をプリントアウトしておいてくれる？」

そう声をかけてきたのは、早紀のマネージャーを務めてくれている江口真子だ。かつて小劇団で女優をしていたという彼女は、モデル事業部の課長としてオーディションの審査員も務めている。

「わかりました」

早紀が手を挙げて返事をする、真子が通りすがりにハイタッチしてきた。

年度末でもある今の時期、社内はいつも以上にあわただしい。

毎年この時期になると、モデルを夢見る人達からの応募件数が格段に増える。

昔は郵送だけだったようだが、今では事務所のホームページやSNSを通じて気軽に応募できるようになった。

応募書類の中には驚くほど容姿端麗な子や、一見、地味だけれど人を惹きつける魅力を持った子の写真があったりする。

華やかで厳しいモデル業界には、常時新しい人材が求められている。

時代とともに流行は変化するし、既存のモデル達もうかうかしてられない。常に時代のニーズに^{こた}応えられるよう準備万端整えておかなければならないのだ。

応募してきた多数の顔写真を見ながら、早紀は自分も負けていけないと気持ちを引き締める。
(それにしても……)

こうして事務所のオーディションを希望する人達に比べると、自分はずいぶんラッキーだったと思う。早紀がモデルになったのは、スカウトがきっかけだった。

当時、早紀はまだ中学二年生。

たまたま母親が経営する純英国スタイルのティーサロン「チェリーブロッサム」の片隅で宿題をしている時、隣家に住む^{とちうま}東条礼子が来店した。

彼女は「チェリーブロッサム」の常連客であり、その日は自身が開いているフラワーアレンジメント教室の生徒を同伴していた。

『あなた、モデルにならない？』

その中の一人が、早紀を見るなりそう言っ腕を掴んできた。それが、現在早紀のマネージャーをしている江口真子だったのだ。

その時の早紀は、すでに身長が百七十センチを超えており学校でも目立つ存在ではあった。けれど、とびきりの美人でもなければ抜群にスタイルがいい訳でもない。目鼻立ちをはつきりしているほうだが、特にこれといった特徴のない和風顔だった。

そんな自分がモデルなんて――

尻込みをする早紀に、江口は「特徴がない分メイクをすればどんなふうにも印象を変えられるし、どんな洋服でも着こなす事ができる」と教えてくれた。

もともとおしゃれには興味を持っていた早紀だ。さんさん迷ったあげく、最終的には周りに背中を押される形でティーン向けファッション誌の読者モデルになる決心をする。

活動をはじめると、驚いた事にすぐに同年代からの支持を得て、人気モデルの一人として紙面を飾るようになった。読者アンケートによれば、早紀の変化自在な雰囲気と等身大の親しみやすさが人気の要因であるらしい。

「おはようございます！」

早紀がプリントアウトした応募用紙をまとめてみると、後輩のモデル達がどやどやと事務所内に入ってきた。

各自挨拶^{あいさつ}をしながらペコリと頭を下げ、キラキラとした顔を上げる。

「おはよう。撮影、どうだった？」

早紀が訊^きねると、先頭にいるシヨートヘアの女性モデルがにっこりする。

「バッチリです！ 現場の雰囲気も最高でした」

「長峰エージェンシー」は、礼儀と礼節を大切にしており、所属した時から挨拶^{あいさつ}はきちんとするようにと教えられる。そのためか、事務所のモデル達は、おおむねどの現場でも評判がいい。

「よかったね。あ、社長がスムージーを差し入れてくれたの。冷蔵庫に入ってるから」

「はーい！」

一列になって部屋の奥に進んでいくモデル達が、早紀が向けた掌に軽くタッチしていく。その列の最後にいた若い男性モデルが、早紀の前でピタリと足を止める。

「おはようございます、早紀さん」

「おはよう、斗真くん。……髪の色、変えたんだね。すごく似合ってるよ」

「そうですか。でもこれ、俺的にはイマイチって感じですよ」

一歩前に出た斗真が、早紀の掌にタッチをした。そのまま手が離れると思いきや、彼は早紀の手を痛いほどギュッと握りしめてくる。

「いつ……」

思わず声が出そうになったけれど、そこは我慢して微笑みを浮かべる。

「さすが握力が強いね。部活、アームレスリング部だった？」

「テニス部です！」

「あ、そう。失礼」

ぺろりと小さく舌を出すと、早紀は握られた手をぶらぶらと振った。

そうして、すでに恒例になりつつある斗真のちよつとへそ曲がりな行動をやり過ごす。

現在中学三年生の彼は、事務所内のみならず国内の若手モデルの中では群を抜いて容姿端麗で、人気もトップクラスだ。身長はすでに百七センチを超え、現在も成長中という。

顔にはまだ幼さが残るものの、性格は同年代に比べるとだいぶ大人びており、常に冷静で落ち着

いた印象があった。

他のモデル達が歩み去っていく中、なぜか斗真だけが仏頂面をしたまま留まっている。彼は早紀の顔をジロジロと眺めたかと思うと、涼やかな眉間に深い皺を刻んだ。

「早紀さん、唇が荒れてますね」

斗真に指摘され、早紀は自分の唇を触ってみた。

「ほんとか。最近、空気が乾燥してるからかな」

「保湿は美肌の基本中の基本ですよ。自己管理ができていませんね。それでもモデルですか？」

斗真に渋い顔をされ、早紀はおどけたふうに「すみません」と言った。

「同じ事務所所属するモデルとして恥ずかしいんですけど。——ああ、そうだ……これ、この間のロケでメイクさんからもらったリップスクラブとリップクリームです。たくさんあるし、他の人にもあげているんで、早紀さんもどうぞ」

押しつけられた小さな小瓶は、無添加製品を扱うブランドのものだ。

「え……いいの？　ありがとう」

「どうせもらいものなんで。じゃ、ちゃんとケアしてくださいよ」

早紀をじろりと睨むと、斗真はツンと顔を背けて去っていった。

残された早紀は手の中の小瓶を目の前に掲げながら、苦笑する。

毒舌でやや斜に構えたところがある斗真だが、本来は気配りのできるいい子なのだ。

ただ、早紀に対してだけ、あたりが強く、何を言うにも嫌味や憎まれ口がセットになっている。

できればもう少し、いい関係になりたいと思うのだが、今のところその希望は叶えられそうもない。早紀が気持ちを切り替えて事務仕事を再開すると、ふたたびドアが開いて顔見知りの郵便局がバッグいっぱい郵便物を持ってきた。

「こんにちは〜！」

「こんにちは！ ご苦労さまです」

愛想よく受け答えをして、早紀は郵便物を受け取る。さまざまな大きさの封筒を専用のボックスに入れ、さっそく仕分けをはじめた。

その郵便物の中に、他よりも一回り大きくて重厚な封筒が交じっている。

白地にクラシックな横文字が並ぶそれを見て、早紀はあつと声を上げそうになった。

（これ……「アクアリオ」の封筒だ）

それは、かつて早紀がカタログモデルをしていたアパレル会社だ。

創業者にして現社長の加瀬杏一郎は、現在三十四歳。もとはパリコレクション——通称パリコレの常連だったスーパーモデルであり、引退するとともに類まれなデザイナーとしての才能を開花させアパレル会社「アクアリオ」を立ち上げた。

「アクアリオ」は現在十のブランドを展開しており、いずれもメインカラーを黒で統一した、斬新かつ時代の先をいく魅力的な洋服が揃っている。なおかつ、非常にデザイン性に優れており、それを身に着けたら、誰もが特別な自分になれると評判だ。

むろん、誰でも簡単に着こなせるものではないし、価格も若者が気軽に買えるようなものではな

い。それでも国内外のファッションニスタの心を捉えて離さないのは、同社の洋服がそれだけ特別で価値があるものだからだ。

そして、そんな洋服をデザインする杏一郎もまたスペシャルであり、今も現役時代と変わらない圧倒的なオーラを放っている。

容姿端麗なの言うまでもなく、身長は百九十センチ近い。

漆黒の瞳と髪を持ち、純粋な日本人でありながら、どこか異国を感じさせる彫りの深い顔立ち。彼に見つめられると、誰もがたじろいでしまうほどの目力があつた。

早紀は当然彼の事は知っていたし、雲の上の人としてずっと憧れの気持ちを抱いていた。

それほど遠い存在だった人が、自分を「アクアリオ」のカタログモデルに起用したいと言ってくれたのだ。当時、まだ大学生だった早紀は、その話を聞いて、腰を抜かささんばかりに驚くとともに、なんとしてでも期待に応えたいと強く願った。

しかし「アクアリオ」のモデルを務めるという重責は凄まじく、求められたのはそれまでの自分では対応できないほどハイクオリティなポーキングや表現力だ。

苦悩する早紀に救いの手を伸ばしてくれたのは、他でもない杏一郎その人だった。

『君を選んだ俺の目に、間違いなどあり得ない』

彼はそう言い切り、早紀にモデルとしての基礎を一から叩き込み、必要とされるスキルをすべて取得させてくれた。その結果、早紀は「アクアリオ」での仕事を果たし終え、その後四年間にわたって同社のカタログモデルを務める事になったのだ。

彼はモデルとしての早紀をステップアップさせ、一人前にしてくれた恩人でもある。

杏一郎との出会いは、早紀にとってその後の人生を変えるほどの大きな出来事だった。

そして、そんな彼こそ、早紀が生まれてはじめて恋をした相手だったのだ。

今でも思い出すたびに胸が痛くなる。

早紀にとつて杏一郎は、心から愛し尊敬できる唯一無二の存在だった。

到底手の届かない孤高の師である彼にどれほど恋焦がれ、想い続けた事だろう。その気持ちは抑えきれないほど強くなり、いつしか杏一郎もその想いに応えてくれるようになったのだ。

早紀は彼との恋に自分の持てるすべてを捧げ、全身全霊をかけて杏一郎を愛した。彼もまたそんな早紀を包み込むように慈しみ、愛情を注ぎ返してくれたのだが……

今から四年前、二人はどうする事もできない事情から別れる事になってしまった。それと同時期に早紀の「アクアリオ」とのモデル契約も終了し、二人は一切の連絡を絶った。

それが別れた時の約束だったし、いまだにそれは続いている。

もともと、同じファッション業界にいれば、彼の仕事ぶりは自然と耳に入ってきた。新作が出れば必ずチェックするし、杏一郎に関する記事はどんな小さなものも読んでしまう。

そんな自分を未練がましいと思ったりもするが、こればかりは仕方がない。

「早紀ちゃん、応募用紙プリントアウトできた？」

背後からやって来た真子に声をかけられ、早紀はハツとしてうしろを振り返った。

「はい、できてます、それと、これ……ついさっき届いたばかりの郵便物です」

早紀は応募書類を真子に渡すと、デスクの上に置いていた郵便物を彼女の目前に示した。

「あら、『アクアリオ』からじゃないの。もしかしてオーディションか何かあるのかもね」

真子が封筒を受け取って、開封する。そして、中に入っていた書類に目を通した。

「やっぱり、そうだ。ほら——」

真子から渡された書類には「アクアリオ」が新しく立ち上げるブランドコンセプトと、同ブランドのイメージモデルオーディションの開催に関する募集要項が書かれていた。

それによると、新しいブランドの名前は「Bi^ビan^{アン}ca^カ」であり、イタリア語で「白」を意味する女性名詞であるらしい。

「黒がメインカラーの『アクアリオ』が、真逆の“白”をメインにした新ブランドを打ち出している訳ね。さすが加瀬杏一郎、常にこちらを驚かせてくれるわ」

真子が感心したように唸り声を漏らす。

「アクアリオ」は毎年二回開催されるパリコレに出展しており、そのたびに見える者を魅了し称賛を浴びている。今回の新ブランドも、きっと「アクアリオ」らしい斬新なものだろう。

「しかもこれ、『アクアリオ』初のレディースブランドでしょ。ぜったいに注目を浴びる事間違いなしね」

以前、早紀がカタログモデルをした際に着ていたのは、既存のメンズブランドの中で作られたユニセックスの洋服だった。

興奮気味に話す真子の前で、早紀は真剣な表情を浮かべる。

(私、この仕事を獲りたい!)

オーディションの書類を見るなり、早紀の心に、モデルとしての熱い思いが湧き上がってきた。この仕事は、今の鬱々とした状況から脱却するきっかけになるかもしれない。

それに、「ビアンカ」のイメージモデルとなれば、世間の注目を浴びるだけでなく、キャリアアップにも繋がる。

そう思うなり、早紀は勢いよく立ち上がった。

そして、驚く真子の目をまっすぐに見つめ、神妙な面持ちで口を開く。

「真子さん、お願いします! 私にこのオーディションを受けさせてください!」

募集要項によれば、事務所に所属している者は、応募するにあたり所属先の許可が必要と記されている。

早紀は真子に向かって深く頭を下げ、再度願いを口にした。

「私、ぜったいにこの仕事を獲りたい! いえ——私がこの先もモデルを続けていくために、是非でも獲らなきゃならないんです!」

「ちよっ……早紀ちゃんったら……」

突然頭を下げられて目を白黒させていた真子は、早紀の並々ならぬ意気込みを見て、深く頷く。

「わかった。雑誌の専属契約も終わるし、いいんじゃない。社長は今、執務室にいると思うから直接話しておいで。大至急アポを取ってあげるから」

そう言うが早いのか、真子が受話器を手にとって社長に内線を入れた。こういう時の彼女は、早紀

がびっくりするほど行動が早いのだ。

「了解です!」

早紀はオーディションの書類一式を手に、別の階にある社長室に向かった。エレベーターを待ちながら、書類を大事そうに胸に押し当てる。

(今日、事務所で仕事してよかった!)

エレベーターが来るなり中に入り、逸る気持ちを抑えながら上階を目指す。

ガラス張りの社長室のドアをノックすると、気づいた社長に手招きされる。

「社長、お忙しいところすみません!」

ドアを開けて中に入り、深々と頭を下げた。

「おいおい、一体どうしたんだ? まさか事務所を辞めるとか言わないよな?」

デスクの前に立つ長峰真也が、早紀の勢いに戸惑いの表情を浮かべる。

「違います! 社長、私に『アクアリオ』のオーディションを受けさせてください!」

早紀から書類を受け取ると、長峰は椅子に座ってじっくりとそれに目を通してはじめる。

彼は「長峰エージェンシー」の二代目社長であり、一時期マネージャーとして早紀を担当してきていた事もあった。

「なるほど。ようやくここまで漕ぎつけたんだな」

長峰が小さく呟いた。その内容から、おそらく新ブランドについて事前に情報を得ていたに違いない。

「お願いします！ 私、どうしても、この仕事をやりたいんです！ 許可をいただければ、万全の準備を整えてオーディションに臨みますから——」

「だけど、大丈夫か？ オーディションに応募すれば、杏一郎と顔を合わせる事になるぞ？」

長峰が心配そうな顔で早紀をじつと見つめてくる。長峰と杏一郎は、高校で知り合って以来の親友だ。そんな関係もあり、彼だけは早紀と杏一郎の間にあった事をすべて承知していた。

「もちろん大丈夫です！ だってもう四年も前の事ですよ？」

早紀は即座に頷いて、にこやかに笑った。

「本当に？」

念を押され、再度頷いてにっこりする。

本音を言えば、杏一郎の事が気にならない訳がなかった。しかし、あえて気にしないようにしていたし、これからだってそうするつもりだ。

「はい。『アクアリオ』のオーディションを受けたいたのは、モデルとして興味を持ったからです。

過去の事は、一切関係ありません」

早紀は、きっぱりとそう言い切って長峰の目をまっすぐに見つめ返す。

「そうか、わかった。そこまで言われたら、許可しない訳にはいかないよ」

長峰が小さく肩をすくめ、早紀はホッとして表情を緩めた。

「ありがとうございます！ 私、全力でオーディションに臨みます。そして、是が非でも合格して今後のモデルとしての活動に繋げてみせますから」

早紀の一方ならぬ決意を感じ取り、長峰が深く頷いて微笑みを浮かべる。

「期待してるよ。……実は、最初に杏一郎から新ブランドの話聞いた時、すぐに早紀ちゃんの顔が思い浮かんだんだ」

「そう、なんですか？」

思いがけない事を言われ、早紀はやや驚いた表情で瞬きをした。

「新ブランドのコンセプトが、早紀ちゃんのイメージにぴったりだと思ってね。これも縁だろうし、精一杯頑張ってくれ」

長峰が席を立ち、早紀に書類一式を返してきた。

「まずは、一次審査用の動画を撮って先方に送らないと、だな」

「はいっ」

応募には、プロフィールと必要書類の他に、全身と顔のはっきりわかる動画を提出する必要があった。最近では、書類審査とともに動画を確認するパターンが増えてきている。今回のオーディションも書類と動画による一次審査を行うようだ。

早紀は逸る心を抑えて、背筋をシャンと伸ばした。

「さっそくオーディション用の動画を作ります。出来上がったらすぐにお見せしますね」

早紀は社長室を辞して、気持ちを落ち着かせるために非常階段に向かった。

（どこで撮る？ やっぱり、自然光の下で撮ったほうがいいかな？）

一次審査で弾かれれば、それで終わりだ。

それだけはぜったいに避けたい——

階段を下りながら、早紀はふと立ち止まった。

(何も、書類を見てすぐに動かなくてもよかつたのに……)

そう思うものの、なぜか抑えがたい衝動に駆られて、行動せずにはいられなかった。

事務所には自分の他にも、若い女性モデルは大勢いる。普段の早紀なら、オーディションの情報を他のモデル達と共有し、応募に関しては事務所の決定に任せていたと思う。

しかし、今回ばかりはどうしても行動せずにはいられなくなってしまったのだ。

それは、もちろんモデルとしてこの仕事に興味を持ったからだだが、果たしてそれだけだろうか？ いや、どう考えてもそれだけが理由ではない。

今の中途半端な状況から抜け出すべく、オーディションを受けようと思ったのは事実だ。

けれど、社長に言った、過去は一切関係ないというのは嘘であり、本当は杏一郎の事をものすごく意識している。

早紀は階段の手すりにもたれかかり、ため息を吐く。

(私、やっぱりまだ、杏一郎さんの事を吹っ切れてないのかな……)

四年前、お互いに話し合っつて別れる事を決めた。それ以来、何度となく忘れようと努力して、そのたびに失敗に終わった。

それでも足掻き続け、疲れ果てた末に、どうにか心の奥底に沈めるのに成功した——そう思っ

いたのだが、どうやら違ったらしい……

早紀は自分の胸に手を当てて、目を閉じた。

走った訳でもないのに、心臓が早鐘を打っているし全身の血が沸いているような気がする。

頭の中はオーディションの事でいっぱいなのに、ややもすれば杏一郎の顔にすり替わってしまいうことになる。忘れたはずの想いは、結局少しも忘れてなんかいなかった。

だから、いつになくテンパってしまい、自分らしくない行動をとってしまったのかもしれない。ずっと抑え続けてきた杏一郎への想いが、オーディションをきっかけに再浮上してきたということころだろうか。

(何を今さら……。もう四年も前に終わってしまった恋なのに……)

早紀が、しょんぼりと肩を落とした時、非常ドアが開き誰かが階段を上ってくる音が聞こえた。振り返ると、やって来たのは斗真だ。

「斗真くん」

「早紀さん、『ピアンカ』のモデルオーディション、受けるんですか？」

下からまっすぐに見上げてくる目力は、さすがトップクラスのモデルだ。

「聞いてたの？」

「聞いてたんじゃなくて、聞こえたんです。早紀さん、バカみたいに大きな声を出してたから」

「ああ、そう。で、それについて何か言いたい事でもあるの？」

早紀はあえて、なんでもない素振りで微笑みを浮かべた。

「いえ、別に。ただの確認です。同じ事務所の人間として、応援してます」

応援すると言う割には、真顔で棒読み。しかし、一応はお礼を言っておく。

「ありがとう。受かるように頑張る」

「だけど、くれぐれも必要以上に僕と父に関わらないでください」

斗真が「父」を強調するように発音する。

彼は早紀を正面から睨みつけたあと、くるりと踵を返し階段を下りていった。

他に人がいる時は、そうではない。けれど、二人だけの時は、相変わらず針のように鋭くて冷たい目つきだ。もう慣れっこになっているとはいえ、本音を言えばあいつの態度を取られるたびにものすごく疲れる。

「必要以上に僕と父に関わらないでください」か……」

早紀は脱力感に襲われて、がっくりとその場にしゃがみ込む。

斗真の言う「父」とは、杏一郎の事だ。

早紀が杏一郎と別れる少し前、彼の弟が海外で客死し、一人残された子供を彼が養子として引き取る事になった。その子供こそが斗真なのだ。

当時、杏一郎との結婚を考えていた早紀は、彼と相談し斗真ともよい関係を結ぼうとした。

けれど、その時まだ小学五年生だった斗真は、決して早紀を受け入れようとしなかった。

斗真にとつて、早紀は新しい生活を脅かし、杏一郎の愛情を横取りしかねない存在に見えたのだろう。それゆえ、こちらがどんなに歩み寄ろうとしても、彼は頑なに早紀を拒み、いつしか精神的

に不安定になっていった。

早紀は何度となく杏一郎と話し合い、その結果、今、優先すべきは斗真の健やかな成長と、少しでも安寧に暮らせる環境であるという結論に達した。

どんなに受け入れたくなくても、斗真の気持ちをないがしろにはできない。

早紀は胸が張り裂ける思いで杏一郎と別れ、彼への気持ちを押し殺す決心をしたのだった。

お互い納得して別れたとはいえ、こうして斗真から敵意を向けられるたびに、胸に押し込めた気持ち古傷となってシクシクと疼く。

そして、今回の事をきっかけに、杏一郎への想いが再び胸に込み上げてくるのを感じている。

だからといって、早紀がどんなに杏一郎のそばにいたいと望んでも、斗真がそれを許さない限り願いが叶う事はない。結局のところ状況は四年前と何も変わっていないのだ。

それに、別れてから四年も経っている。

杏一郎にはもう、誰か他に想っている人がいても不思議ではない。

オーディションに合格すれば、必然的に杏一郎と再会する。

その時、自分は一体何を思うのだろうか？

どうであれ、もうオーディションを受けると決めたのだ。今はオーディションに受かる事だけを考えよう――

早紀は両方の頬を掌でピシャリと叩き、勢いよく立ち上がった。

これはある意味、自分に課せられた試験なのかもしれない。

モデルとして新たなステージに立てるかどうかはもちろん、杏一郎への想いをどうするか、はつきりさせるいい機会になるはずだ。

「よし！ とにかくまずはオーディションに合格する！」

早紀はそう言つて拳を握りしめた。

日々コツコツと努力を続けてきたのも、こういったチャンスを確実に掴むためだ。

（今はただオーディションに合格する事だけを考えよう……）

早紀は自分にそう言い聞かせ、しっかりとした足取りで階段を下りていくのだった。



桜の蕾が少しずつ膨らみはじめた、日曜日の午後。

杏一郎は都心に建てられたタワーレジデンスの最上階にいた。自宅は別にあるが、基本的に家は仕事を持ち帰らないようにしている。

そのため、どうしてもこなさなければならぬ仕事がある時は、ここに来てそれを片づけるようにしていた。部屋のインテリアはモノトーンで統一しており、無機質な心地よさがある。

以前は、もう少し部屋の中に植物を置いていたのだが、手入れ不足のせいか今残っているのはカウンターキッチンの上にあるミントだけだ。小さな植木鉢に植えられたそれは、窓からの陽光を受けて青々と茂っている。

杏一郎は冷蔵庫からミネラルウォーターのボトルを取り出して、テーブルの上に置いた。

黒革のロングソファに腰かけ、襟元のボタンをひとつ外す。

杏一郎が普段着ている服は、すべて自社のものだ。それは別に愛社精神からではなく、ただ単に身体にじっくりして着心地がいいからそうしている。

今日身に着けているのは、定番のカラーシャツと今期最速で完売したテーパードパンツだ。裾に向かつて次第に細くなつていくそれは、皺が付きにくい加工を施している。シンプルな形で他社製品とも合わせやすく、普段使いには最適な品だと思う。

「アクアリオ」が扱っている洋服は決して安価ではないが、その分、使用する生地をはじめ、裁断や縫製にこだわりを持って作っている。

頭の中は新しいデザインの事でいっぱいだし、年に二回のパリコレへの出展や国内外の販売状況など、考える事は山積みだ。ここ何年かは隙間時間を埋めるように仕事を詰め込み、プライベートなどあつてないような状態になっていた。

それに今は、新しいブランドである「ビアンカ」を世に送り出すべく、あれこれ準備を進めている最中だ。

（今年度は、ますます忙しくなるな）

これまでには年に二回、パリコレで新作を発表していた「アクアリオ」だが、「ビアンカ」を世に出すにあたり、今年度は三回の出展になる。

パリコレとは、今から百年以上前にスタートした、フランスはパリで開催される、世界中のデザ

イナーによる新作発表の場だ。もともとは、パリでの展示会がはじまりだったそれは、大きく分けて三つのコレクションに分かれている。

そのひとつが、女性向けの高級既製服が発表されるパリ・プレタポルテ・コレクションだ。同コレクションは、毎年三月と十月頃に行われる。

二つ目は、顧客の注文によって作られるオーダーメイド品を対象に行われるオートクチュール・コレクション。これは、毎年一月と七月頃が開催時期とされている。

三つ目は、オートクチュールと同時期に開かれるパリ・メンズ・コレクションで、「アクアリオ」は、例年ここで新作を発表している。

これにプラスして、今年度は三月に行われるウイメンズ用のプレタポルテ・コレクションで、新たに「ビアンカ」を発表する予定だ。

第一弾のデザインはすでに決定しており、試作品の出来上がりを待つて微調整を加えるのみ。しかし、もともと神経を使う仕事を終えた状況でも、心からゆつくりと休む事はできなかった。

一体、いつからこんなふうになってしまったのだろう。

気がつけば一日中仕事に没頭し、食事を取るのを忘れている事もある。けれど、それで構わなかった。仕事に忙殺されているほうが余計な事を考えずに済む。

『まるで休むのを怖がっているみたいだな』
少し前、親友で「長峰エージェンシー」の社長でもある長峰にそう言われた。反論しようと思っただが、あながち間違っていないような気もして、黙って睨みつけておくに止めた。

「さて……仕事するか」

ミネラルウォーターを一口飲み、デスクの上のノートパソコンを開く。

いくつかのメールをチェックして返信をしたあと、今日のメインである「ビアンカ」のイメージモデルに関わる仕事に取り掛かった。

杏一郎が手掛けた「アクアリオ」は、今年で十年目を迎える。

そんな節目の年に発表する新ブランドは、今までのイメージを打ち破る斬新さが必要だ。

そう考えた杏一郎は、自社のイメージカラーである黒の真逆の色を取り入れる事を決めた。

メインカラーはブランドの名前のおり「白」であり、「アクアリオ」における初のレディースブランドになる。

これまではモードかつ、ハードでクールなイメージを守り続けていた「アクアリオ」だが「ビアンカ」では、もともとのコンセプトを守りながら、そこに女性らしい「優しさ」や「温もり」をプラスしたラインナップを打ち出していく予定だ。

これまでになく準備に時間をかけているのは、それだけ「ビアンカ」に強い思い入れがあるからだ。

杏一郎は「ビアンカ」専用のフォルダーを開き、「一次モデルオーディション通過者」と題された八十二名の動画ファイルに次々と目を通していく。

募集をかけたのは十代から三十代の日本人女性モデルで、応募総数はおよそ千五百人。

あらかじめ「ビアンカ」専任スタッフが審査しふるいにかけてかれている。

自分は、そこからさらに人数を削り、最終的に二次審査に進むメンバーを選び出す。体型はあまりスリムでないほうが望ましく、顔に個性がありすぎてもいけない。

動画の人物に「ビアンカ」のイメージを重ね合わせ、違和感があれば躊躇なく「不合格」の判定をしていく。一気に動画の三分の一を見終わり、さすがに疲れて椅子の背もたれに身体を預けた。(ここまで見て、ピンとくるモデルはゼロか……。先が思いやられるな)

杏一郎が「ビアンカ」のモデルに求めるのは、ナチュラルな美しさだ。

ルーージュを塗りたくっているよりはヌーディな唇が、目力が強すぎるよりは素直でまっすぐな視線のほうがいい。

そう思う杏一郎の頭の中には、すでにモデルのイメージがくつきりと浮かんでいる。

桜井早紀——かつての恋人にして、最愛の女性だ。

彼女と一生をともしたいと考えていたが、ある事情で別れを告げる事になった。思い返すたび、いまだに胸が苦しくなる。

未練を断ち切るために、お互いに二度と連絡はしないと約束したが、早紀を想う気持ちは今なお胸に残り、ついには彼女をイメージした「ビアンカ」という新ブランドを立ち上げてしまった。

我ながら未練がましいと思う。今ひとつモデル探しに気分が乗らないのも、早紀以上の適任者はいないとわかっていいるからだ。

本当に愛していた。けれど、今さら合わせる顔もない。

「早紀……」

杏一郎は早紀の名を呼び、窓の外に視線を移した。

彼女とはじめて会ったのは、早紀が大学一年の春の事だ。

当時「アクアリオ」のメンズブランドの中で、新しくユニセックスの商品を販売する事になった。それに伴い、女性のカタログモデルが必要になり、親友であり芸能マネージメント会社に勤務する長峰に相談を持ちかけたのだ。

彼は、それからすぐに「適任者がいる」と言っ、宣材写真を片手に、わざわざ社長室まで出向いてきた。その時推薦されたのが早紀だった。

『悪くないな』

宣材写真を見て、すぐにそう言った記憶がある。

実際は、悪くないどころかかなり気に入っていたし、無条件で惹きつけられた。

しかし、当時の早紀はキャリアも浅く、ティーン雑誌の読者モデルを務めた経験しかなかった。そんな早紀が、果たして「アクアリオ」の洋服を着こなせるかどうか疑問だったのも確かだ。

実際に会った早紀は、緊張のせいか、写真以上に素人っぽく見えた。それなのに、第一印象を上回る吸引力を感じたのは、早紀がいろいろな可能性を秘めているのがわかったからだ。

まっすぐな視線や飾り気のない笑顔に、彼女の真面目さや素直さが表れていた。

モデルとして変な癖がついておらず、その分さまざまな変化が期待できる——そう思ったから、早紀を「アクアリオ」のカタログモデルに起用した。

それと同時に、彼女に自分の持てる知識のすべてを与え、成長を見守りつつ自らの手でプロのモ

デルとして開花させてやりたいと強く願ったのだ。

今思えば、その時すでに一人の男として早紀に惹かれていたのかもしれない。

当時まだ十代だった早紀にとって、「アクアリオ」のモデルを務めるのは、かなりハードな仕事だったと思う。

杏一郎は自ら早紀の指導に当たり、彼女が「アクアリオ」にふさわしいモデルと言えるようになるまで一切の妥協を許さなかった。

『大丈夫か?』

杏一郎は何度となく、早紀にそう訊ねた。そのたびに彼女は、大丈夫ですと答えて、にっこり微笑んだ。その言葉どおり、彼女は弱音ひとつ吐かず杏一郎の指導についてきたし、少しでも多くの事を学ぼうという姿勢を崩さなかった。

その結果、こちらが期待した以上の完成度で、ブランドイメージを的確に体現してくれた。

以後、四年にわたり自社のカタログモデルに起用し続け、二人の仲も必然的に深まっていった。

(そういえば、あのミントを買ったのは今頃の季節だったな)

杏一郎は外を見ていた視線をキッチンカウンターに向けた。

普段、たしなむ程度にしかアルコールを飲まない杏一郎だが、早紀と付き合いはじめてからは、一緒に家で飲む機会が多くなった。そして、早紀が好んで飲んでいたのが、ミントの葉をたっぷり使ったモヒートだったと思いつく。

彼女の事を心から愛していたし、本気で結婚を考えていた。

しかし、写真家である弟の友介が海外で客死した事により、自分を取り巻く環境が一変した。

彼は十九歳の時に結婚し子供が一人いたが、八年後に離婚して、親権を持つ友介がその子供・斗真を育てていた。

友介が亡くなった当初、斗真は別れた母親に引き取られる予定だった。しかし、彼女はすでに別の男性と結婚して海外に住んでおり、斗真との同居は難しいと判断せざるを得なかった。

母方の祖父母はすでに亡く、父方の祖母は存命だが彼女もまた海外で暮らしている。

当時の斗真は、まだ十一歳で、父親の死を受け入れられず、極めて不安定な状態だった。

そんな事もあり、最終的に杏一郎が斗真を引き取る事になり、養子縁組をして親子関係になったのだ。

一緒に暮らすうちに、斗真は徐々に心の平穏を取り戻していったように見えた。おそらく、実父と顔がそっくりの自分を本当の父親と慕ってくれたのだと思う。

聞いた話によると、友介は離婚して子供を引き取ったあとも、頻繁に海外を飛び回り留守がちだったそうだ。その間は家政婦などが斗真の面倒を見ていたようだが、それでは家庭の温もりなど感じられるはずもない。きっと彼は、長い間ずっと寂しい思いを抱えていたのだろう。

その反動なのか、斗真は過剰だと思えるくらい杏一郎にまとわりつき、恋人の早紀をあからさまに敵視するようになった。

「お父さんを取るな!」

彼はそう言うのは、歩み寄ろうとする早紀を拒絶し、泣き叫んではひどい癪癪を起こすように

なった。あげくの果てには、熱を出して寝込んでしまい、医師からストレス性の体調不良と診断された。そして面と向かって憎悪を向けられた早紀も、精神的にかなり参っている様子だった。

このままでは、彼女に苦勞をかけるのは目に見えている。そう考えた杏一郎は、悩んだ末に早紀と別れる苦渋の決断を下した。

以後の杏一郎は、斗真の面倒を見ながら、それまで以上に仕事に打ち込んだ。そうする事で早紀を忘れようとしたのだが、すぐにそれが簡単でない事を思い知った。

通りすがりの書店で早紀が表紙の雑誌を見かけては、つい立ち止まって手に取ってしまった。彼女への気持ちを捨て去ろうとすればするほど、昔付き合っていた頃の幸せな思い出が頭の中に蘇ってくる。

(結局、忘れられないまま四年か……)

おそらく早紀はとくに自分など忘れ、誰か別の男性と付き合っているはずだ。

そうなる事を願って別れた。なのに、いつまでも未練がましく彼女の事を考えてしまう。

パソコンの画面には、オーディション参加者の動画が次々に自動再生されている。

ひとつの動画が終わり、少しだけ間が開いた。

新しく映し出された参加者が、落ち着いた声で自己紹介をはじめ。

その声を聞いた瞬間、杏一郎はソファから勢いよく身体を起こし、画面に映る女性を食い入るよう見つめた。

そこには、白いTシャツと淡い色のスカートを穿いた早紀が映っている。

カメラがゆっくりとズームインし、横を向いていた顔が正面を向く。にっこりと微笑む口元から真つ白な歯が見えた。彼女が画面の中でくると一回転する。

続いて顔から笑みが消え、まったくの無表情になった。

正面に向けられた視線が、画面を通してまっすぐに杏一郎を射抜いてくる。

ほぼベースメイクのみでアイラインも引いていない顔は、四年前よりもぐっと大人びてシャープさを増している気がした。

息を詰めて画面に見入っているうちに、動画が終了する。杏一郎はキーを操作してもう一度、はじめから動画を再生した。画面の中の早紀が、にこやかに笑いかけてくる。

足の運び方やボーリングした時の目線など、彼女の一举手一投足に、かつて自分が教え込んだ事の片鱗が垣間見えた。

早紀は、それらを今も忘れずにいる。短い動画を見ただけでそれが伝わってきて、杏一郎は我知らず口元に笑みを浮かべた。

ひたむきで努力家な彼女の性格は、きつと今も変わっていない。それどころか四年の歳月が、早紀をモデルとして成長させ、画面の向こうから杏一郎の心を鷲掴みにしてきた。

やはり、彼女こそが、「ビアンカ」のイメージを体現できる唯一無二のモデルだ。

すべてのオーディション動画を見終えた杏一郎は、そう確信する。むろん、この決定には私情はまったく挟んでいない。

早紀は別れたあともモデルとして成長し続け、自分の力で一次オーディションを通過した。

こうなった以上、早紀との再会は決まったようなものだ。そう思うだけで、自然と脈が速くなり、いても立ってもいられない気持ちになる。

杏一郎はソファから立ち上がってキッチンに向かった。

カウンターの植木鉢からミントを摘み取り、用意したグラスに入れて少量のブラウンシュガーとともにマッシュヤーですり潰す。そこにラムとトニックウォーター、氷を入れて豪快に混ぜ合わせてモヒートを作った。

杏一郎はそれを一口飲み、ゆっくりと目を細める。

つい今しがた見た見た早紀の顔が、頭から離れない。彼女のまっすぐな視線に射抜かれて、ずっとくすぶり続けていた想いが完全に復活してしまった。

(もし、早紀がまだ一人だったら……)

そんな考えが頭に浮かび、思わず苦笑する。だが、もしそうだったら――

自分は間違いなく、早紀を手に入れようとするだろう。

そして、彼女が自分を受け入れてくれたなら、もう二度と離さない。

何があっても、ぜったいに。

杏一郎は、そう心に決めると、グラスに残っていたモヒートを一気に飲み干すのだった。



三月最後の月曜日。昨夜からの雨で、街中がしっとり濡れそぼっている。

「アクアリオ」のモデルオーディションの一次審査に合格した早紀は、今日、二次審査を受けるべく電車を乗り継いで同社の最寄り駅に到着したところだ。

(ちよっと早く来すぎちゃったな)

早紀は、途中で腹ごしらえをするつもりで、かなり早めに事務所を出ていた。

時刻は午後一時。二次審査がはじまるのは、午後二時からだ。

予定どおり駅から少し歩いた場所にあるカフェに入ったものの、緊張のせいかメニューを開いてもまるで食欲が湧かない。

オーディションの前とはいえ、少しは食べないと、力を出し切れない可能性がある。

しかし、どうしても食べる気になれず、野菜スムージーを飲んだだけで席を立った。

いつもならオーディション前でも食欲旺盛おっせいで困るくらいなのに……

こんなに緊張するのは、二次審査の会場に杏一郎がいるのがわかっていているからだ。

応募要項によれば、彼と顔を合わせるの最終審査のはずだった。それが、数日前に急遽変更になり、「ピアンカ」の制作スタッフの他に杏一郎が二次審査に立ち会う事になったのだ。

まさかこんなに早く杏一郎と再会を果たす事になるとは思ってもいなかった。心の準備がまだできていない。

しかし、決まってしまった事はどうしようもないし、オーディションを勝ち進めば、いずれ彼とは顔を合わせるのだ。

(今はできる事をやるしかない!)

早紀は自分にそう言い聞かせて、心を落ち着かせるように呼吸を整える。

そうこうしている間に、遠くの空で雷が鳴りはじめた。

「アクアリオ」の本社は、カフェから歩いて二十分くらいの距離にある。

早紀が会計を済ませているうちに、急に雨脚が強くなった。みるみるうちに、外はバケツをひっくり返したような土砂降りになってしまふ。

天気予報では、ここまで悪天候になるとは言っていなかったのに、これでは傘を差してもずぶ濡れになってしまふぞうだ。

覚悟を決めて歩き出した時、運よく乗客を降ろしたばかりのタクシーを拾う事ができた。傘を閉じ、急いで後部座席に腰を下ろす。

「すみません。近くで申し訳ないんですが——」

早紀が行き先を告げようとした時、少し先にタクシーを探している様子の老婦人が目に入った。

ほっそりとして華奢なその人は、傘を差してはいるがレインコートの裾がぐつしよりと濡れている。自分は運よくタクシーを拾えたが、この雨ではきつと空車は通らないだろう。

早紀は運転手に頼み、老婦人がいる道路脇まで車を進めてもらった。そして、彼女に声をかけるとき先を訊ねてみる。

聞けば、老婦人は早紀が目指す建物の少し先にあるシティホテルまで行きたいようだ。

「よかったら、一緒に乗って行ってください」

「いいんですか？　そうしてもらえると助かるけど——」

早紀の申し出を受けて、老婦人はタクシーに同乗する事になった。幸い道はさほど混んでおらず、スムーズに「アクアリオ」の本社前に到着する。

タクシーが停車し、早紀はここまでの料金を老婦人に渡そうとした。

「いいえ、どうか料金は私に持たせてくださいな」

老婦人はそう言って早紀が支払いをしようとするのを止めた。しかし、それではあまりにも悪い気がする。そこで早紀は、タクシー代の代わりに老婦人へひとつお願いを聞いてほしいと頼んだ。

「実は私、これから大事なオーディションがあるんです。それに合格できるよう、私を励ましてもらえませんか？」

四年ぶりとなる杏一郎との再会と、この天気だ。実のところ、さつきから気持ちがざわついて仕方がない。

快く承知してくれた老婦人は、早紀に向き直り両方の掌で早紀の手を包み込んだ。

「あなたはとても優しくいい人だから、きつとオーディションに受かりますよ。私が保証します。気負わず自然にしていれば、きつと大丈夫。落ち着いて自分が出せる力を十二分に發揮してね」

強く手を握られ、正面からじつと目を見つめられる。

「あと、これをあげるわ。これは幸運のキャンディよ。舐めると気持ちが落ち着くの」

老婦人はバッグからキャンディの入った小さな袋を取り出して、それを早紀に渡した。

「頑張つてね。幸運の女神は、きつとあなたに微笑んでくれるわ」

優しく励まされ、早紀の口元に自然な微笑みが浮かんだ。

「ありがとうございます。オーデイション、頑張ります！」

早紀はそう言うのとタクシーを降りて傘を差し、中にいる老婦人に手を振った。老婦人もまた中から早紀に向かって手を振ってくれている。

去っていく車を少しの間見送ったあと、早紀は降りしきる雨の中「アクアリオ」の社屋の前に立ち、気持ちを引き締めつつ中に歩を進める。

いよいよオーデイション本番だ。

そう思うと、自然と武者震いが起きた。握りしめた手の中でキャンディの袋がカサカサと音を立てる。袋の中には、透明のセロハンに包まれた丸くて真っ白なキャンディが五つ入っていた。

早紀は立ち止まり、袋からひとつキャンディを取り出して口に入れた。食べた途端、口の中に爽やかな甘みが広がる。

(ミント味だ。……これ、すごく美味しい)

早紀が知るミントキャンディは、今食べているものよりも固くて清涼感が強い。

しかし、老婦人からもらったキャンディは舐めているとホロホロと崩れながら舌の上で溶けていき、とても優しい味がする。

キャンディの美味しさを感じ入っているうちに、気持ちが少し楽になった気がする。

早紀は鼻腔を通るスッキリとしたミントの香りを楽しみながら、意識的に肩の力を抜いた。

(「気負わず自然に」か……)

さつき聞いた老婦人の言葉が、早紀の頭の中に蘇った。

(そうだよね……ここまで来たんだから、とことんありのままの自分で勝負しよう！)

早紀は、エレベーターホール奥にある自動販売機コーナーに向かった。そこはかつて「アクアリオ」のカタログモデルを務めていた時、幾度となく訪れた場所だ。

まるで古巣に戻ってきたような心持ちで、そこを通り抜けて奥にある化粧室に入る。

洗面台の鏡の前に立つと、湿気のせいでセットした髪がかなり乱れている。それに、昼に直したメイクも少し崩れていた。

バッグからブラシを取り出し、背中までのウェーブヘアを丁寧に梳かして、耳の高さでポニテールにした。その後、携帯していたメイク落としで顔全体を拭いて、水でさぶさぶと洗顔する。

顔を上げた早紀は、鏡に映る自分を凝視した。

ノーメイクだし、ヘアスタイルもこれ以上ないほど無造作なひとつ結びだ。

さつきまでと比べたら一気に顔が地味になったし、心なしかいつもより血の気が失せている。一瞬、早まったかと思っただけで、今さらあとには引けない。

早紀は掌でパンと白い頬を叩いた。

血行が良くなり、頬に赤味が戻る頃には、どうにか気持ちも整ってきた。

(よし、行こう！)

すべての準備を終えた早紀は、覚悟を決めてオーデイション会場に向かう。

会場は「アクアリオ」の商品が並べられた六階アトリエだ。受付を済ませ、中に入った。

全体が白で統一されているそこは、照明や音響機器などの各種装置が設置されており、適宜（てきぎ）ファッションショーのリハーサルなどが行われている。

以前何度もここを訪れた事がある早紀は、懐かしさを感じながら会場の中を見回した。オーディションに参加するモデル達が集まったところで、全員が舞台裏に通され、スタンバイをする。あたりを見回すと、何人か顔見知りがあった。中には、テレビでよく見かける売れっ子モデルまで交じっている。他にも、ショーを中心に活動しているモデルもいた。

当然ながら、早紀以外は皆、きちんとメイクしており、ヘアスタイルもばっちり決まっている。思わず気後れしてしまった早紀だが、すぐに気を取り直して自分を奮（ふる）立たせる。

（……これでいくつて決めたんだから、堂々としなさいよ、早紀！）

早紀は意識して背筋を伸ばし、しっかりと前を向いた。

二次審査の内容は、会場の真ん中に設置されたランウェイを一人ずつ自由に歩くというもの。

それぞれが用意されたお揃いの衣装に着替え、もといた部屋に戻る。

普段雑誌中心の仕事をしている早紀だが、日頃から事務所に併設されたジムとレッスン場に通い、ひととおりウォーキングとポーシングを学んでいた。大規模なファッションイベントに出演してランウェイを歩いた経験もある。

だが、オーディションメンバーの中では、おそらく早紀が一番、経験値が低いだろう。

しかし、今それを気にしたところでどうしようもない。

早紀は、できる限り心をフラットにしてオーディションの開始を待つ。

途中、知り合いのモデルとともに舞台袖（せき）から会場内を窺（うかが）つてみた。

ランウェイの長さは、およそ八メートル。その両脇に一定の間隔を開けて審査員らしき男女が座っている。位置的によく見えない席もあるが、どんなに目を凝（こ）らしてみても、その中に杏一郎の姿はなかった。直前になって、参加を取りやめたのだろうか？

それならそれでいいし、むしろ気が楽というものだ。

早紀は内心ホッとして舞台裏に戻った。

時間になり、オーディションが始まる。まずは、名前を呼ばれた者から、それぞれカメラの前でポーズを取るカメラテスト。それが済むと、今度はショーさながらのウォーキングを行う。一人ずつ順番にランウェイの先端まで歩き、ポーシングをしてからふたたび舞台袖（せき）に戻るのだ。

カメラテストのあと、ほどなくして、会場内が暗くなりランウェイにのみ照明が当てられる。

（よかった。このほうが歩きやすい）

ランウェイを歩く時の鉄則のひとつに、目線は正面に置いて動かさないといいがある。そうすれば頭の位置もブレないし、自然と歩き方も美しくなるのだ。

視界に入るものが少なければ、それだけウォーキングに集中しやすくなる。

早紀の番号は全体の中ほどだ。順番を待つうちに少しずつ緊張が高まっていく。

（大丈夫。気負わず自然に……落ち着いて自分が出せる力を十二分に発揮して）

早紀は、老婦人からかけられた言葉を頭の中で繰り返し唱えた。

オーディションはすみやかに進められ、いよいよ早紀の順番がきた。

早紀はまっすぐに前を見据え、ランウェイを歩きはじめる。静かな部屋の中に、カツカツという靴音だけが鳴り響く。

両側から値踏みするような視線を浴びながら、ランウェイを歩く。あとはボーキングをしてスタート地点に戻るのみ――

そう思った時、視線を置いている正面のドア付近に背の高い男性が立っているのに気づいた。逆光のためシルエットしか見えない。しかし、その均整の取れた見事な体形と自分に向けられる強い視線で、それが杏一郎である事がわかった。

(杏一郎さん……)

早紀は一瞬にして全身が熱波に包み込まれたような感覚に陥る。

かつて杏一郎からモデルとしてのノウハウを叩き込まれた早紀は、今と同じように全身に彼の視線を浴びながら、脚が棒になるまでウォーキングをした。

彼から学び、教えられたすべての事が、早紀の全身に染み込んでいる。

杏一郎がいなかったら、きっと今の自分はない――そう言い切れるほど、早紀にとって彼は大きな存在だった。

そんな彼が、今、自分だけを見ている。

早紀の中で、ビリビリと弾ける火花のような感情が湧き起こった。

それは、モデルとしての自分を彼に見せたい、という今までにない強い感情だ。

杏一郎から学んだすべての事、さらにはこの四年間で培ってきたものを総動員し、出せるだけの

力を出し切って今の自分を彼に伝えたい――

沸々と込み上げてくる熱を感じながら、早紀はランウェイの先端でピタリと立ち止まった。

視界の端に彼のシルエットを捉えながら、最高のボーキングを決める。

小さく息を吸い込むと、微かにミントの香りがしたような気がした。

『気負わず自然に』

その言葉がふたたび頭の中に蘇ると同時に、身体から余計な力が抜けて心身が軽くなる。

そうだ――これが今の早紀ができるすべてであり、彼に見てほしかった自分だ。

まっすぐ前を見つめる早紀の口元に、一瞬だけ笑みが浮かぶ。

早紀はそのまま、くるりと踵を返し颯爽とランウェイを戻っていくのだった。

四月になり、あちこちで満開の桜を見る機会が多くなった。

吹き抜ける風に、昼間の暖かさを感じる金曜日の夜。早紀は、仕事を終えて電車に乗り込んだ。

ドアのそばに立ち、何気なく天井からぶら下がる車内広告を眺める。

(あ、「ティーン・ポップ」だ)

早紀がモデルとしてスカウトされ、はじめて紙面に載ったのが「ティーン・ポップ」というティーン雑誌だった。同誌を卒業してずいぶん経つが、そこで出会ったモデル仲間とは今でも交流がある。現在はモデル業から離れている人が大半だが、全員が同じ時期を駆け抜けた大切な仲間だった。

広告から窓の外に視線を移し、ぼんやりと流れていく景色を見つめる。

二次オーディションから十日以上経ったが、結果はまだ出ていない。当日は自分の持てる力を出し切ったという達成感はあるが、それは他の参加者も同じだろう。

ランウェイで杏一郎の視線を感じた時、彼への想いが少しも変わっていない事に気づかされた。それと同時に、モデルとして前に進みたくても、なかなか思うようにいかなかった気持ち、驚くほど前向きになっているのを感じた。

オーディションに出たおかげで、モデルとして新たに一步前に踏み出せたような気がする。こうなったら、是が非でもオーディションに合格し「ピアンカ」のモデルとして、さらなる高みを目指したいと強く思う。

(杏一郎さんは、オーディションの時の私をどう思ったのかな……)

『俺が造る洋服をただの布切れにするつもりか?』

それは、かつて「アクアリオ」のカタログモデルに大抜擢された早紀に、杏一郎が言った言葉だ。彼は、モデルとしての経験や技術が足りない早紀に対し、事細かにブランドのイメージを伝え、それを体現するためのノウハウを叩き込んでいった。その厳しさといったら、それまでに築いてきたモデルとしてのアイデンティティを根本から覆くぶされるほどだった。

あれからもう八年以上経つ。

(あの時、杏一郎さんに教えてもらってなければ、今もモデルを続けられていたかわからないな) どんなに厳しくても、彼の言葉にはブランドやファッションに対する熱意や愛情が感じられた。

それが伝わってきたからこそ早紀も、最後まで逃げずに頑張れたのだ。

そうして一緒に過ごすうちに、早紀はいつしか彼に強い恋心を抱くようになった。

そんな事を考えていた早紀は、ふと、かつて彼とよく行った店の事を思い出す。なぜか急に懐なつしくなり、久しぶりにそこへ行ってみようと思いつく。

次の駅で電車を乗り換えた早紀は、何年かぶりに目的の駅のホームに降り立った。

そこはかつて杏一郎が住んでいたマンションの最寄り駅。早紀は、記憶を頼りに改札を出て左方向に歩き始める。

その店の店主は、昔からこの土地で豆腐屋を営んでいたらしい。彼は還暦かんれきを迎えたのを機に店をたたみ、新たに居酒屋の経営者になったそうだ。

早紀は杏一郎に連れられて、何度か店を訪れた事があった。

別れて以来一度も来ていなかったが、早紀はこの店のゴマ豆腐が大好きだったのだ。

(まだあるかな? まさか閉店してたりしないよね……)

勢いのままここまで来てしまったが、もし店がなくなっていたらどうしよう?

そんな不安を抱きつつ、以前とさほど変わらない街の様子にホッとする。同時にチクリとした胸の痛みを感じたのは、この道を通って杏一郎のマンションに行っていたのを思い出したからだ。

最初に斗真の事を知らされた時、まさかそれが二人の別れに繋がるとは思ってもみなかった。

彼の事を心の底から愛していたし、本当は別れたくなんかなかった。

最初の一年など、心身ともにどん底で何もやる気が起きなかった。それでも仕事だけはどうか

こなし続け、結局はそれが気持ちのリハビリになって少しずつもとの自分に戻っていったような気がする。もともと、実際は涙が枯れ果てただけで、想いはずっと消えずに残っていたのだが……

当時の事を思い出しながら歩を進め、目指すビルの前に来た。そこに見慣れた看板を見つけて、早紀は思わずにつこりと微笑みを浮かべる。

(よかった、まだあった！)

地下に続く階段を下り、店の前に立つ。暖簾越しに中を窺ってみると、当時とまったく変わらないう様子だ。早紀は思い切って引き戸を開けて、中に入った。

「いらつしやいませ」と声がかかり、店主が早紀の顔を見てにつこりと微笑む。軽く手を振ってくれたところを見ると、まだ顔を覚えていてくれたみたいだ。指を一本立てて一人である事を知らせると、店主は早紀を空いているカウンター席に案内してくれた。

店内は以前と同じで、カウンター席の他にテーブル席が二つあるのみ。見ると、同じカウンター席の端に見覚えのある男性客が座っていた。

「あれっ、早紀ちゃん？」

「春日さん——」

早紀に声をかけてきたのは春日康太というフリーカメラマンだ。

彼はちょうど一年前から「CLAP!」の契約カメラマンになっており、先月のウェディングドレスの撮影でも一緒に仕事をしたばかりだ。

「一人？ それとも待ち合わせか何か？」

「一人です。春日さんは？」

「俺は人と待ち合わせ。だけど、さっき仕事が終わらないから少し遅くなるって連絡があったんだよね。よかつたら隣にどうぞ？」

「じゃあ、お連れの方が来るまで」

早紀は店主の許可を得て春日の左隣に座った。さっそく頼んだゴマ豆腐を食べながらビールを飲み、春日と雑談を交わす。

春日とは、彼が「CLAP!」の専属になる前からの知り合いで、今から二年前、彼に宣材写真を撮ってもらって以来、すっかり顔見知りになっている。早紀は春日に勧められるまま日本酒を頼み、取り分けてもらった煮物に箸をつけた。

陽気でお喋り好きの春日は、コロコロと話題を変えながら話し続けている。早紀は聞き役に徹しつつ、以前と変わらない店の様子や料理の味を懐かしく思った。

知らない間に杯が進み、少し酔ったと感じて一息つく。

「お連れの方、遅いですね」

「そうだな。そういえば、これから来る奴、結構な有名人なんだよ。せっかくだし、よかつたらこのまま一緒に飲まない？」

「いえ、私はもうそろそろ——」

「そう言わず、ちよつとだけでも——って、そういえば、早紀ちゃんって昔……あ、ほら。来た来た！」

春日が入り口に向かつて手を挙げた。それにつられるように、早紀もうしろを振り返る。その直後、こちらに向かつて歩いてくる杏一郎が、早紀の目の中に飛び込んできた。

早紀を見た彼が、驚いた顔で立ち止まる。

どうしていいかわからなくなった早紀は、杏一郎を見つめたまま席を立ち、そのまま数歩後ずさった。動揺しているせいか、足元が少しふらついてしまう。なんとか踏ん張って体勢を整え、椅子の背もたれに掛けていたバッグを手にする。

「早紀ちゃん、大丈夫？もしかして酔っぱらった？」

「いえ、大丈夫です。お相手が来たようなので、私はこれで失礼しますね」

「えー？まだいいじゃん。杏一郎、お前もそう思うだろう？」

バッグから財布を取り出そうとする早紀の手を、春日が掴もうとしてくる。

しかし、それよりも一瞬早く伸びてきた杏一郎の手が、それを阻んだ。

「酔っぱらってるのはお前だ。ほどほどにしとけて、いつも言ってるだろ」

杏一郎の手が、早紀の身体を腕の中に抱き込んでくる。

突然の出来事に驚き、心臓が跳ねて頭にカツと血が上った。どうにか冷静になろうとするのに、混乱して何も考えられなかった。

「大丈夫か？無理をするな」

昔と同じがっしりとした胸板を感じて、鼓動がいつそう速くなる。

「誰かと待ち合わせか？」

「い……いえ、私一人です」

「じゃあ、もう帰ったほうがいい。大通りまで送っていくよ」

「でも……」

「言う事を聞きなさい。あいつは一度絡みはじめたら潰れるまで離さないぞ。春日の酒癖の悪さは業界でもトップクラスだ」

そう言うと、杏一郎は店主に支払いを全額自分につけておいてくれるよう頼んだ。

「春日、俺は彼女を送っていく。待たせたのに悪いが飲むのはまた今度しよう。お前も、もう帰ったほうがいい」

「俺はまだそんなに酔っちゃいないぞ！」

「そうは見えない。とにかく、今日はお開きだ」

「なんでだよ。ちよつとくらい、いいだろう？」

「ダメだ。彼女は、うちの最新ブランドの大切なイメージモデルだ。何かあつては困るから、すまないが今日はこれで終わりだ」

（えっ……い、今なんて？）

まだ文句を言っている春日を軽くないしつつ、杏一郎は早紀を連れて店の外に出た。

早紀の戸惑いをよそに、杏一郎は人で混雑する駅前通りを通り抜け国道のほうに歩き進める。

彼の手は依然として早紀の身体にしっかりと回されており、ひどく歩きにくい。

「あ……あの、か……杏一郎さんっ……」

早紀は思い切って彼の下の名前を呼んだ。すると、彼は早紀のほうを振り向いてじつと顔を見つめてきた。そして、ふいに進む方向を変えて横道に入っていく。

そこは古くからの住宅街に続く道で、街灯はあるものの薄暗くあたりには誰もいない。何本目かの電柱を通り過ぎたあと、杏一郎がいきなり歩く足を止める。

早紀は若干つんのめりそうになりながら、立ち止まって彼の顔を見上げた。街灯はかなり光度が落ちている。しかし、杏一郎の眉間に深い縦皺が寄っているのが、はつきりわかった。

「早紀」
四年ぶりに名前を呼ばれ、早紀は無意識に身体を硬くする。彼に「早紀」と名前を呼んでもらうのは、別れた日以来だ。

けれど、彼の表情は、どう見ても自分との再会を喜んでいるようには見えない。

こんなに近くににいるのに――

早紀は視線を下に向けて「はい」と返事をする。杏一郎への変わらぬ想いを自覚した今、彼との心の距離が悲しかった。

「久しぶりだな……元氣そうで何よりだ」

低い声で話しかけられ、早紀はふたたび杏一郎と視線を合わせた。

「はい、杏一郎さんも」

ぎこちなく再会の挨拶を交わし、少しの間お互いに沈黙する。

「今日は、どうして春日と？ あいつとは、親しいのか？」

杏一郎の眉間の縦皺が、いつそう深くなった。

「春日さんとは二年前、宣材写真を撮ってもらったのがきっかけで知り合って……今日は、偶然お店で会って、待ち合わせてる人が来るまで、ご一緒させていただいていたんです」

「……そうか」

彼はそう言って頷き、早紀の顔を瞬きもせずに見つめてくる。

その目力に気圧されながらも、早紀は気になった事について質問を投げかけた。

「あの、さっきの『新ブランドのイメージモデル』っていうのは――」

「ああ、明日の朝にでも、長峰に連絡を入れようと思っていた。オーディションの結果、君が『ピアンカ』のイメージモデルに決定した。審査員全員が早紀を選んで、満場一致で決まったんだ。おめでとう」

「え……本当ですか？」

早紀が聞くと、杏一郎がゆつくりと頷く。

早紀は、すぐに声が出ないほど驚き、次の瞬間、喜びに包み込まれた。

「あ、ありがとうございます！ ご期待に沿えるよう一生懸命頑張りますので、どうぞよろしくお願いたします」

ようやくそれだけ言うと、早紀は深々と頭を下げた。

込み上げてくる高揚感で、自分の声が震えているのがわかる。

「こちらこそ、よろしく頼むよ」